まかり通る

小島直記

〈下〉激動編

まかり通る

直記

《下》激動編

毎日新聞社

まかり通る(下) 激動編

1973年12月1日　印刷
1973年12月10日　発行

著　者　小島　直記

編集人　浜田　琉司

発行人　朝居　正彦

発行所　毎日新聞社

〒100　東京都千代田区一ツ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒450　名古屋市中村区堀内町
〒802　北九州市小倉区紺屋町

印刷所　図書印刷

製本所　大口製本

0093—400088—7904

激動編　目　次

転機　九
仙人　一五
コークス　二三
異議　二六
ナンバー2　三四
ナンバー3　四〇
早逃げ名人　四六
小林一三　五三
ナンバー4　五九
豹変　六六
電車　七二
未決囚　七七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

政治熱　八三
代議士　八九
川上貞奴　九五
暗い部分　一〇一
中野正剛　一〇七
花の都　一一三
近衛文麿　一一九
総理大臣　一二六
再会　一三三
獅子身中の虫　一三八
役人ぎらい　一四四
さらば！　一五〇

耳庵　一五六
潮騒　一六三
松下亭　一六六
大喝　一七四
暗闇問答　一八〇
浦島太郎　一八七
交渉　一九三
出馬　一九九
企み　二〇五
女狐　二一一
騒然　二一七
GHQ　二二三

抵抗　三九
予測　三三五
妙なこと　二四一
大役　二四七
池田成彬　二五三
激怒　二五九
鬼　二六五
相棒　二七一
俗論　二七七
空砲　二八三
フェニックス　二九〇
残照　二九六

装幀　安彦勝博

激動編

「サンデー毎日」（昭和四十七年十一月十九日号～昭和四十八年十月十四日号）連載

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

転機

一

「士別れて三日ならば、即ち当に刮目して相待つべし」

という。

刮目とは、眼をこすってよく注意して見ること。何を待つかといえば、その男の変貌、開眼、人間的成長ぶりにほかならない。

平々凡々と、その日ぐらしをするだけでわがこと足れりとする男の生き方を、「酔生夢死」という。

そうでない男は、かならず自覚し、発奮し、努力して自己改造をなしとげる。

ただこの場合、かならずしも《三日》にこだわる必要はない。これは、ある時間の流れ、というふうに見ればよいだろう。

ある男にとっては、半年や一年の場合もあろうし、また別の男にとっては、それ以上の場合もあろう。

だが、あまり長期間では具合がわるそうだ。このことばには、そういうニュアンスが感じられる。

「男である以上、三日もたつうちには、かならず変貌、成長しているべきだ！」

そういう一つの規準を、自分の心の戒律とせよ。

そうすべきだと、世の男たちを叱咤し、激励することばというふうにも受けとれるのだ。

大暴落でどん底につき落とされた松永安左ェ門や小林一三が、このことばを知っていたかどうかははっきりしない。

しかし、二人にはたしかにこの刮目に値する変貌、開眼、成長があった。

ただ、そのテンポは同一ではなかった。小林の方が早かった。

浪人生活二ヵ月。「阪鶴鉄道株式会社監査役」というポストを岩下清周に用意してもらった。

阪鶴鉄道というのは、現在の国鉄舞鶴線と福知山線とを経営する私鉄で、その本社は現在の国鉄池田駅の山手の丘の上にある。大阪から十一キロ。

「岩下さんのおかげで、安定した三井生活を無理に断ち切らされた。それなのにちっともかまってくれない。あんまり無責任だ」

と、小林は岩下を恨んでいた。したがって、「監査役」にしてもらったことを感謝し、よろこんでいいはずだが、彼の表情はかならずしもほがらかではない。

それは、会社の命数があと半年でつきるからだった。

大体、日露戦争までは、日本全国の鉄道はほとんど私鉄の経営だった。ところが戦後、

「鉄道は国有にすべし」

という意見が強くなった。

兵員、軍需資材の輸送は戦争の死命を制する。ところが、各地の鉄道が別会社にわかれていてバラバラでは、それがスムーズにいくはずはない。

日本の政治家で「鉄道国有論」を最初にとなえたのは、自由党の星亨だ。

同党提出の「鉄道国有」建議案は、明治三十一年の第十三議会において衆議院を通過したが、貴族院でさえぎられ、その後ほとんど忘れられていた。

日露戦争中、総理大臣の桂太郎大将が国有の必要を認め、法案をつくって、後継ぎの西園寺内閣に実行を依頼した。

この審議は、議会最初の乱闘事件をひきおこしたが、結局、反対派すべてが退場か棄権、投票総数二一四票、可とするもの同数で、『国有鉄道買収法』が成立した。

買収される私鉄は十七社で、阪鶴鉄道もその中に入っている。

その買収の時期は明治四十年八月で、つまり、小林一三の「監査役」はそこまで、というわけだ。

「重役とは名ばかりで、たった半年のいのちなんだ」

小林は自嘲し、なんとなく小バカにされているような感じをもった。

だが、それこそまさに、彼が「刮目」すべき自己改造をなしとげていない証拠だった。岩下は別の任務もあたえていたのだ。

阪鶴鉄道の大株主たちは、政府買収のことが表面化したころ、別の電鉄会社をつくることを計画した。

大阪を基点として、池田、宝塚、有馬にいたる間、池田から箕面にいたる間、および宝塚と西宮との間に、電気軌道を敷設しようというものだ。

その「箕面有馬電気軌道株式会社」設立案に対しては、内務大臣の認可もおりている。

資本金五百五十万円。

株数は五十円券十一万株。

このうち五万三四〇〇株を阪鶴鉄道の株主に優先的に割当てることになった。

そこまではよかった。ちょうど株式ブームの頃だ。

まだ設立されないこの会社の株に、一株二十円のプレミアムがつき、株の割当で重役間に争いがおきたほどである。

その争いで創立事務が停頓したところに、大暴落だ。こんどは、出資を引きうけた連中が払込みを渋りはじめた。

岩下は、この新会社の創立事務促進という大役を小林一三にまかせたわけだ。

「君の役割は、阪鶴鉄道の葬式をすることではなくて、箕面有馬電軌の産婆役になることだよ」

といったのもその意味である。

だが、そのことがまだ小林にはピンとこなかった。
重役たちが、退職慰労金のことでは夢中になるのに、新会社創立問題になると別人のように消極的となる。
その矛盾に気づきながらも、
「それではオレはどうすべきか？」
そのことを本気で考えてみようとはしなかった。
刮目して待つべき変化は、まだおきていなかったわけだ。
ところが、ふとした偶然がその契機となったのだから、人間の運命はわからない。

二

ある月曜日の午後、重役会が開かれることになっていた。
そのとき小林は、大阪から池田まで、電鉄の予定線を歩いてみよう、とおもった。
「運動不足だからちょうどいいだろう」
その程度のことを考えていたにすぎない。
その散歩は快適だった。
雲雀が空高くさえずっていた。
森や林が静かにつづき、その間からせせらぎの音が聞こえた。
麦畑、菜種畑の間に点々と農家が散らばっている。
そういう平和で、のどかな故郷の韮崎をおもい出させた。
よく似た風景のなかに、喜々として遊んでいた幼い日のことが蘇った。
ところが、ふっと現実に返り、その道が電車の予定線だということをおもいだしたのだ。
「ここを電車がはしれば、こんないいところに住めるのに……」
ということをおもった。自然な、素直な感想だった。
それがきっかけになった。彼の体内深く眠りこんでいた経営感覚が、その素朴、単純な感想に触発されて、とつぜん頭をもち上げたのだ。
彼の脳裏に浮かんだのは、ゴミゴミした大阪の市内だった。
大阪市の人口は、年々増える一方なのだ。日清戦争の前年頃は、四十八万人といわれていた。
それが日露戦争後、百二十万人となっている。
東京市の場合、日清戦争の前年が百二十一万人、明治四十一年が二百十九万人、大体二倍たらずの増加率なのに、大阪市はほとんど三倍に近い。
その急増した人びとが、ゴミゴミした市内にあふれている。どこもかしこも満員で、借家もなかなか見つからないという。
この激増した人口を収容するところは、もはや市内ではなく、郊外でなければならない。
（人びとを郊外に住まわせ、その人びとを大阪市内に運ぶとすれば、電車の経営は成り立つのではないか……）
眼をさましたばかりの「経営者」の感覚が、そうささや

く。
彼は、重役たちの顔をおもいだしていた。
彼等が電車に消極的になったのは、暴落後の反動不況による金づまりが原因ではある。だが、そのほかにも一つ、採算性、将来性への疑問、不安が大きくなっているためだ。
京都・大阪間、神戸市内、神戸・明石間、大阪・奈良間という路線ならば、都市と都市とを結ぶから将来性がある、と彼等はいう。
「箕面有馬電軌はあかん。都市と田舎を結ぶ田舎電車にすぎんからな」
と、ある重役はいった。これは大方の意見を代表しているとみていいだろう。
箕面有馬電軌の終点となるべきところには、紅葉の名所の箕面、温泉としての有馬はある。
けれども、いずれも貧弱な行楽地で、四季を通じて多くの客を引きつけるだけの力はない。しかも沿線は人口の少ない農村である。
「とうていソロバンは合わんな」
という結論になる。
だが、小林のアイデアはその常識論をとびこえて、新しい視野を前方にひろげていた。
彼の考えは、その未開の処女地にぐいぐいつき進んでいく。
新会社の設立難は、世間にも知れている。沿線の地主もバカにしている。
その心理を利用するのだ、とおもった。
地価は安い。その安い時価よりも少しいい条件で買収にかかる。
地主たちはよろこんでとびつくだろう。会社ができてもどうせつぶれる。そのとき、また安く買いたたいて買いもどせばいい。そうおもって売るだろう。
それを大量に買う。かりに坪一円とする。しかし、電車が開通し、交通が便利になれば、かならず土地の値段はあがる。
開通後、少なくとも坪三円五十銭に値上がりするとすれば、毎半期五万坪を住宅地として分譲していくと、半期十二万五千円の利益となる。
数字は仮りのものだが、この方法を原型とすればよい。電鉄事業そのものでもうからなくても、沿線の住宅地経営でやっていけることをそれは意味している。
そして、住宅ができて沿線の人口が増えるにつれ、電車の乗客も増えるから、やがて電鉄事業そのものも経営が成り立つことになる。
小林は、そう考えた。

三

その夜、小林は岩下清周を訪ねて自分の考えを述べた。
「機械や主材料を三井物産から買うことにすれば、あなたの

おロぞえで延べ払いも可能ではないでしょうか。そうできれば、第一回の払込金だけで開業できる見込みがあります」

岩下は、葉巻を吹かしながら聞いている。何もいわないが、むしろ沈黙こそ、一三の考えに興味をもっている証拠にちがいない。

小林はそこで形を改めた。

「そういうわけですから、現在の未引受株五万余株について、なんとかして引受人をこしらえてくださいませんか。そうして、私にこの仕事をやらせていただきたいのですが——」

岩下は、不意に葉巻を灰皿におしつけて消してしまった。まだ三分の一ほどしか吸わないものをそうやって消すところに、彼の気持がむきだしになっている。

「機械のことは、飯田義一君に話せばできる。岩原君がアメリカから帰ってきて、何かうまい仕事はないかといってきたばかりのところだ。彼にたのめば、米国一流のものが買いつけできるだろうし、その代金の延べ払いについても相談はできるだろう。その点は問題ない。ただ問題なのは——」

岩下は、きびしい眼で小林をにらみつけた。

「問題なのは、君自身だ。なんだ君は、仕事をやらせていただきたい、といういい方はなんだ。君も三井をとびだして独立したはずではないか。独立したのなら、自分一生の仕事として、責任をもってやってみせる、という決心が必要ではないか。それを、やらせていただきたいとは何ごとだ。そういうひとだのみ、甘え根性で何ができる！」

その一喝は痛かった。いや、痛い、というものとはちがっていた。おそらく、電気衝撃とはこんなものではないか。脳天から爪先まで、ビリビリッとしびれてしまった。

小林は、一言半句も反発できない。

散歩の途中でひらめいた考えは、決してわるくはなかったとおもう。

だが、かんじんの、自分の主体性が曖昧だった。

自分には、平銀行員の体験しかない。事業の経営については、まったく自信がなかった。そこで岩下を考えた。

岩下の力によって、株主が集まり、会社が設立される。自分はその会社の重役に入れてもらって、重役報酬がもらえればありがたい。もう二度と浪人のみじめさを味わわなくてもすむし、重役の肩書ならば世間体もいい。

その程度のことしか考えていなかった。

(なんという虫のよさか！)

岩下の一喝には、そういう自分の卑小さ、たよりなさ、ずるさを強く反省させる力があった。

(そうか。これはおれの仕事だ。おれの生涯かけた事業として、全責任をもってやりぬくという決心が必要なのだ)

翌日から、《全責任をもってやる》ための工作にかかった。

まず、会社設立の発起人になる必要がある。この点について、すでに発起人となっている人びとも、小林を《追加発起人》とすることに異議はなかった。

だが、その追加発起人がすべて一人で切りまわすということには難色を示した。当然である。みんなロボットになってくれ、といわれているのと同じだからだ。

そこを小林は押しきった。そのかわり、金銭上の負担は全部自分が負うことにした。万一、設立に失敗したとしても、他のものには一銭も損はかけない、という条件だ。

「口約束だけではどうも……」

といわれ、正式の契約書をつくった。

その第四条に、「前各項ノ権利ヲ甲（小林一三）ニ附与スルニツイテハ、万一不幸ニシテ本会社成立セザルカ、又ハ解散セザルヲ得ザル場合ニハ、創業費ソノ他発起人ナラビニ創立委員ニ於テ負担スベキ金銭上ハ勿論、ソノ他一切ノ責任は甲ニ於テ負担シ、乙（小林以外の発起人および創立委員）ニ何等ノ煩累ヲ及ボサザルモノトス」という文句を入れた。

これによって、発起人たちはやっと安心し、判をついた。

（若僧奴、威勢のいいことをいうているが、これでいつでもイキの根を止められるんだぞ）

そういうおもいだ。

しかし、小林の頭を占領していたのは、大借金をかぶった重苦しい気持ではなかった。

ひたすらに前を見て、ようやくにぎった権限をいかに有効に使うか、ただそのことだけを考えた。

まず、創立事務費に大ナタを加えることとした。創立事務にタッチしていて、そのじつは何もしていなかった阪鶴鉄道側の人間を全部解雇した。

事務所をうつした。高麗橋一丁目の桜セメント。ようやく動きはじめた平賀敏の事業の《城》に、二階の一室が空いていた。

そこを一月二十円の家賃で借りることにした。給仕、小使、電話、電気などの使用料もその中にふくめてもらった。

その小さな部屋で事務をとるものは総員三名。

そのあと、小林は東京に出た。新しい株主を見つけ、五万四〇〇〇余株の失権株を引きうけてもらわねばならない。

文字どおり東奔西走して、ようやく約一万株をまとめた。まだ目標にはほど遠いが、残りは岩下が北浜銀行で引きうけてくれた。

岩下は当初から失権株全株を引きうける力をもっていたが、小林の力の入れ方、その成行きを温かく見守っていたのだ。

こうして、第一回の払込みが完了し、創立総会がひらかれたのが十月十九日。

小林は専務になった。社長には岩下を考えているが、創立早々でまだ海のものとも山のものともわからない。

「ご迷惑をかけてはならぬ」

と考えて、社長は空席。やがて軌道に乗り、もう大丈夫と見きわめがついたら、岩下にたのむつもりである。

こうして、小林もはじめて自分の《城》を持った。刮目すべき転機を、自らの手でつくったわけだ。箕面有馬電軌はやが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.